

## 遠心力の合成による推進力について

2011.09.22 初版発行

グラビティエンジニアリング株式会社 都田 隆

### 1. はじめに

遠心力と重力が釣り合っているから月は落ちてこないと言った。国際宇宙ステーションの内部が無重力空間なのは地球の重力と遠心力が局所的に打ち消し合っているからである。このことは遠心力と重力は局所的に合成可能であることを示している。遠心力は人工的で局所的な重力場を作るので、遠心力と遠心力も合成可能である。

2つの遠心力を組み合わせて部分的に打ち消したり増幅させたりすれば、その方向制御が可能である。遠心力を生じさせ続けるのにエネルギーは必要ない。遠心力の方向を制御すれば、エネルギーを必要とせず、物体を加速させることができる。

それは永遠にエネルギーを出力する装置や宇宙空間を無補給で加速し続ける装置を製造できることを意味している。その具体的な方法が以下に示される。

### 2. 遠心力の方向

回転する座標系から観測すれば、例えば遠心分離機の内部にいる観測者から遠心力を観測すれば、遠心力は回転軸の中心から周囲へ直線として働く力として観測される。(図 2.1)

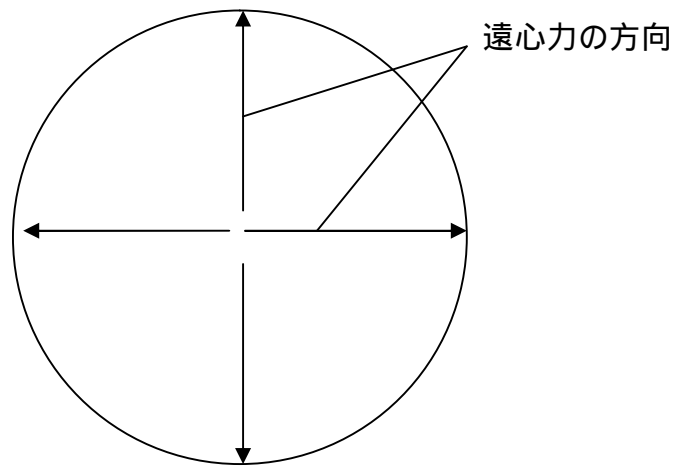


図 2.1 回転する座標系から観測した遠心力の方向

一方、円盤に対し回転していない地上に固定したような座標系から観測し、回転する円盤上の遠心力場の C 点から物体 M を落とすとす。物体 M が外周に到達する間に  $1/4$  回転するとすれば物体 M は螺旋軌道で C 点から B 点に到達する。非回転の座標系から観測した遠心力の方向は螺旋状ということである。

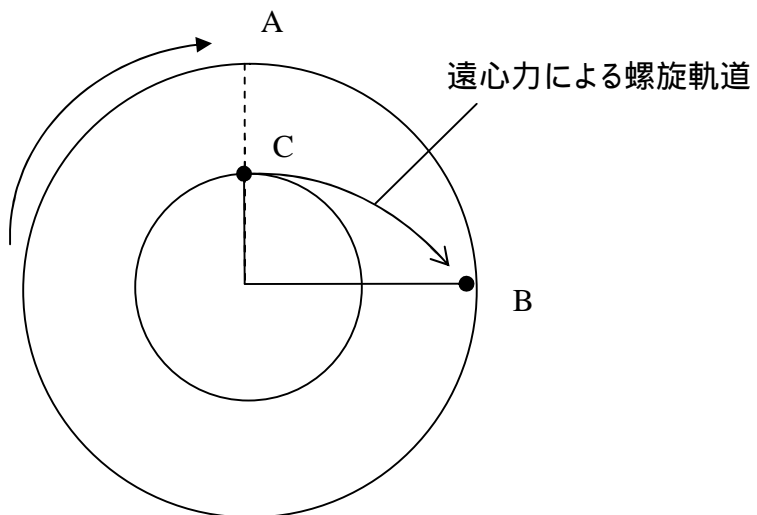


図 2.2 非回転座標系から観測した遠心力の方向

### 3. コマの運動

コマの回転軸を水平にするとコマ全体は下図のように運動する。

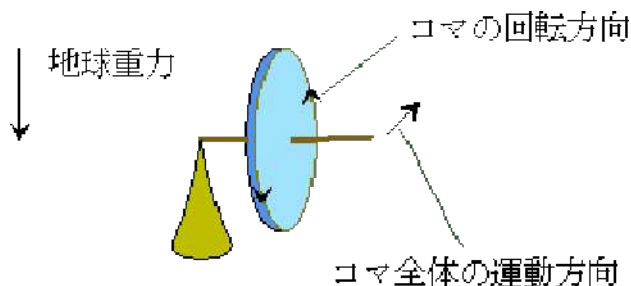


図 3.1 軸水平コマの運動

どうしてこのように運動するのだろうか。その理由は現代物理学においても謎の1つだと思われるが、事実、そのように運動する。これは誰でも簡単に実験によって確かめることができる。

この理由について以前は野球のカーブボールが曲がる流体力学的現象の類推で考えていたが、実際はそれとはかなり異なっていることを見落としていた。誰にも誤りはある。誤りが見つかれば修正すればいい。

それは空気がボール内を透過しないのに対し、重力は透過するということである。

カーブボールが回転することによる空気への影響はボールの外部にあって内部にないが、コマが回転することによる遠心力の影響はコマの内部にあって外部にはない。(コマの周りの重力場も回転するだろうが、その影響は無視できるくらい小さいだろう。遠心分離機による重力加速度は数万 G にもなるが、周囲の重力の変化はほとんど観測されない。)

コマ全体の推進の現象は地球重力とコマ内部の遠心力との合成によって生じる。コマの外周が下向きへ運動する部分の遠心力は地球重力と合成し増幅され、上向きへ運動する部分は打ち消されて減衰される。

増幅された遠心力と減衰された遠心力が合成されるとコマ全体は推進することになる。

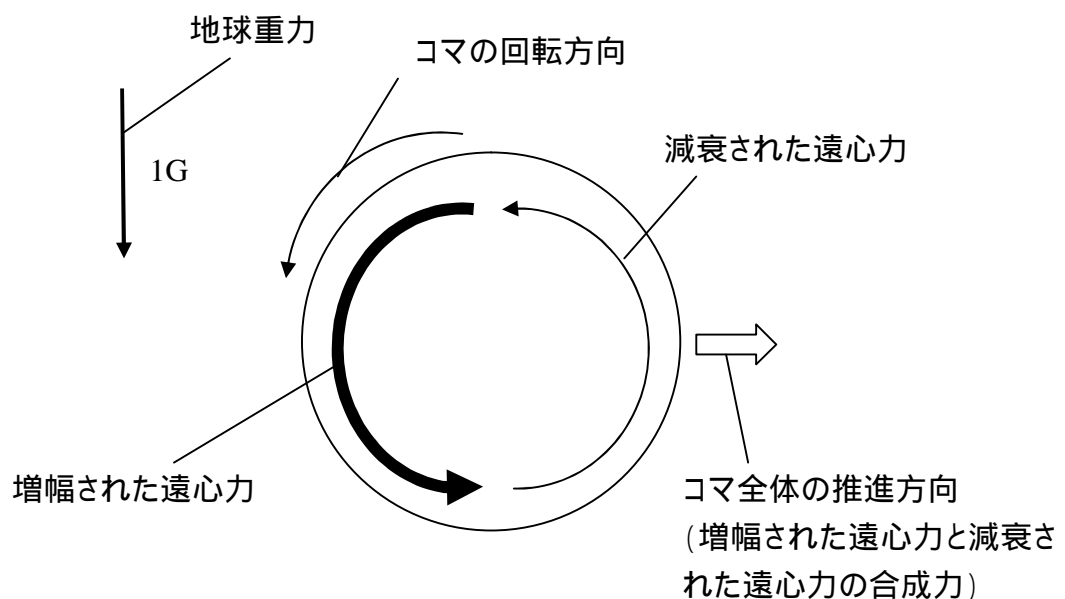


図 3.2 地球重力と遠心力の合成

コマ全体に働く推進力は元からあった遠心力と地球重力が合成されることにより表面化したものであり、新たにエネルギーが加えられたことによるものではない。

遠心力を生じさせ続けるのにエネルギーは必要ないから、コマ全体に働く推進力を生じさせるエネルギーを発生させるために外部から新たなエネルギーを注入してやる必要はない。このコマ全体に働く推進力を生じさせるエネルギーは他の何かから換わったというものではなく、言わば無から生じているものである。

#### 4. 遠心力の合成機構

普通の遊星歯車機構は、外周歯車を固定し太陽歯車を回転させることで衛星歯車を回転させ、ギヤ比の変換を行うことが目的である。この場合衛星歯車の回転による回転遠心力場と衛星歯車の移動による移動遠心力場の相互作用による推進力の方向は、衛星歯車の移動方向とは反対になる。

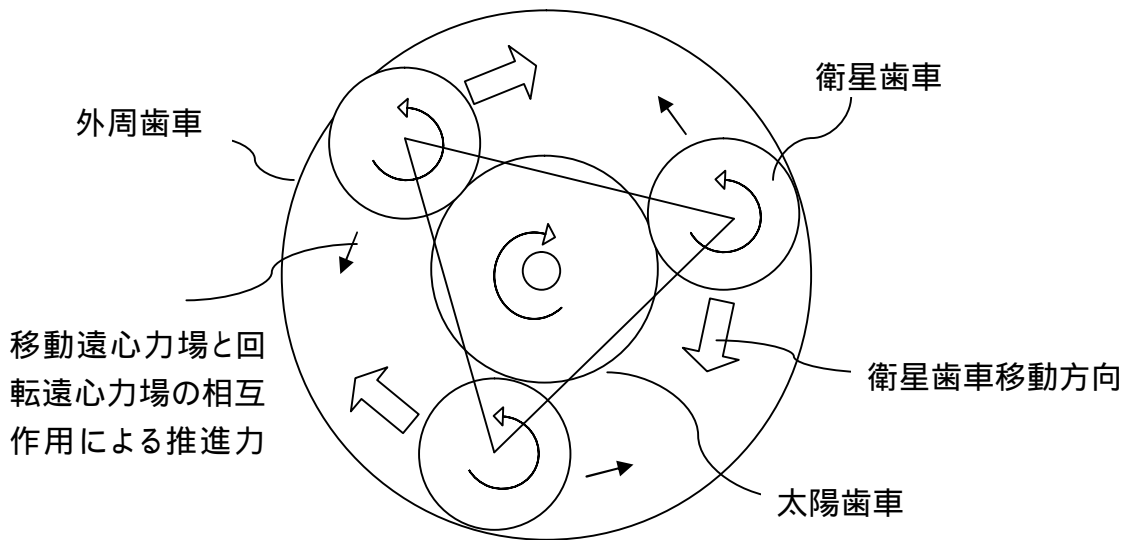


図 4.1 普通の遊星歯車機構とその遠心力相互作用の推進力方向

遊星歯車機構の太陽歯車を固定し、衛星歯車を回転させるようにすれば、外周歯車が回転することになる。このような方法でもギヤ比の変換は可能である。この場合、衛星歯車を作る回転遠心力場と移動遠心力場との相互作用による推進力の方向は衛星歯車の推進方向と同一になる。

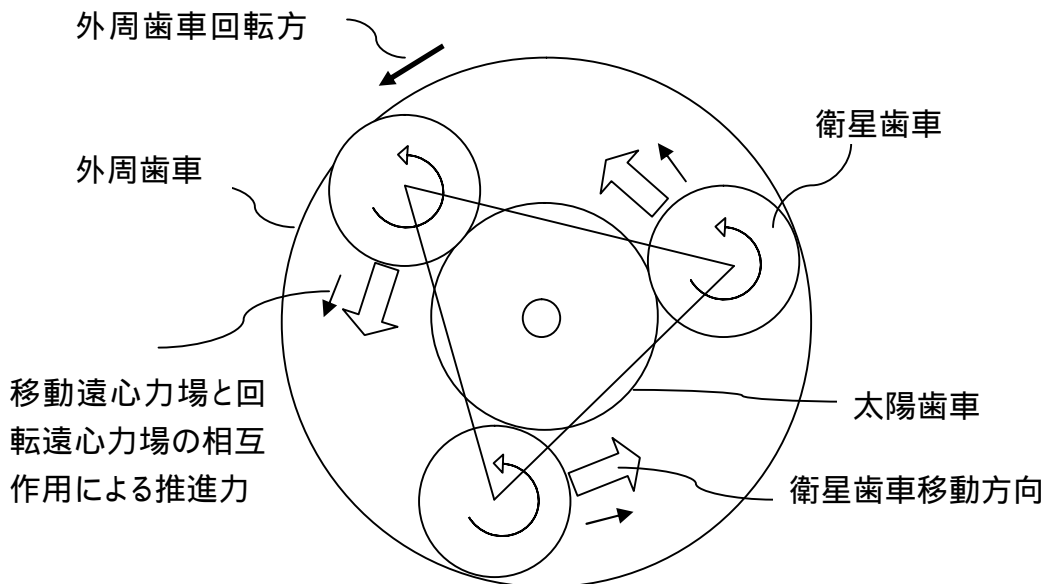


図 4.2 遠心力相互作用の推進力方向を考慮した遊星歯車機構

重い衛星歯車は回転遠心力場をつくり、移動遠心力場と相互作用することにより推進力を発生させ、回転数を自己増幅させる。この単にギヤを組み合わせただけの遊星

歯車機構は自身の回転数を自己増幅させる永久機関になるのである。

永久機関とはエネルギーを出力し続けるエンジンということである。

これは一つのエンジンである。遊星歯車エンジンでは少し長いので遊星エンジンと命名することにする。既存の動力装置に組み込めばエネルギーの消費を減らすための省エネルギー装置としても使えるが、本質的には、そのような脇役ではなく主役としてエネルギーを生み出すことができるものである。

機械系エンジニアであれば誰でも知っている遊星歯車機構というありふれたシンプルな構造が、人類が長年探し続けていた宝だった。わかってしまえば実に簡単なことであった。

## 5. 大小2つの円盤による遠心力の合成による推進機構

国際宇宙ステーションの内部が無重力空間なのは、地球の重力と遠心力が釣り合っているからであり、遠心力と重力は区別することができないというのは良く知られている。遠心力が加えられている局所的空間というのは重力が加えられている局所的空間と区別できない。遠心力は半径が大きいほど大きくなる。半径の大きい円盤と半径のやや小さい円盤では半径の大きい円盤がより大きな遠心力を発生させ、その局所的な重力も外側に向けて半径の大きな円盤の方が大きい。近くで半径の大きな円盤とやや小さい円盤を同一方向に回転させれば、重力の大きい局所場と重力が小さい局所場が隣接することになる。(図 5.1)

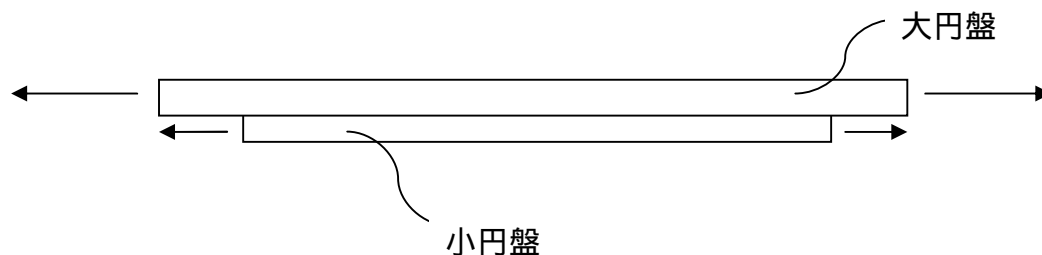


図 5.1 遠心力の大きな局所重力場とやや小さい局所重力場の隣接

重力場内の物体は重力の小さいところから大きいところに向けて進む。この際の重力の方向は、小円盤の遠心力によって作られた重力場が大円盤の方に曲げられたということになる。(図 5.2)

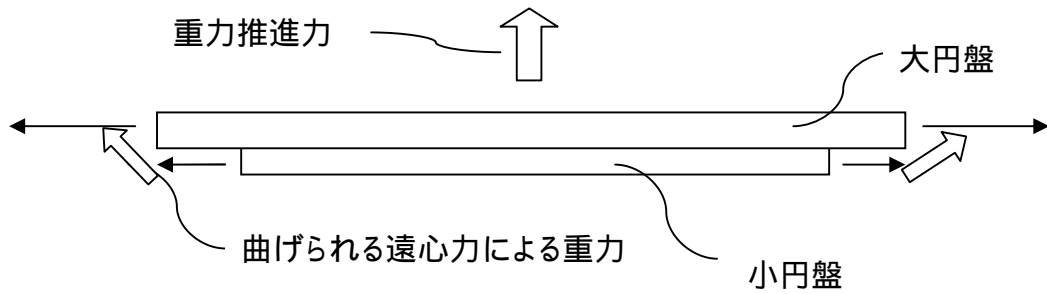


図 5.2 曲げられる遠心力による重力

結果として、重力による推進力が生ずることになり、重力は方向を制御できるのである。

この実験は大円盤に小円盤を貼り付けて回転させればいいだけなので簡単にできる。この推進力の存在は 15 年以上前に実験によって確認した。

## 6. 重力推進方向制御

遊星エンジンの中央部分は中空にできるので、1 周り小さい遊星エンジンを中央部分に設置することができる。(図 6.1)

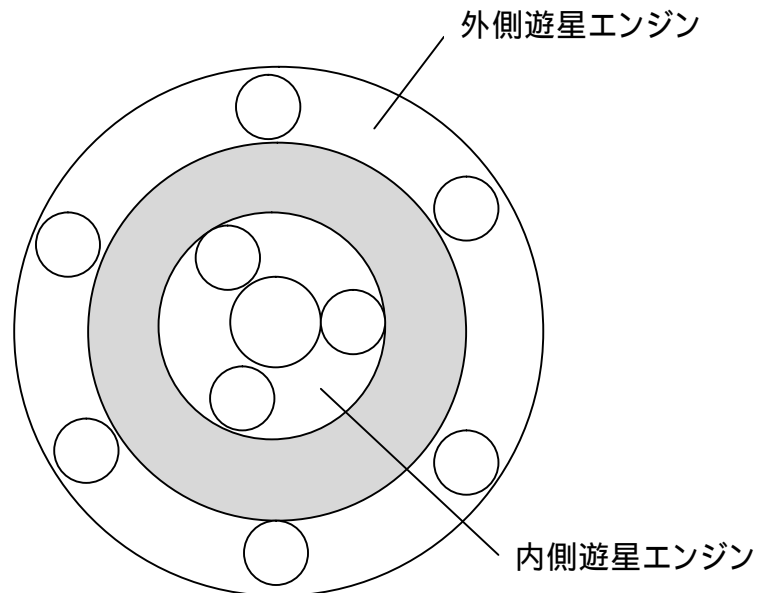


図 6.1 2つの遊星エンジンによる重力推進方向制御

内側遊星エンジンを上下左右に可動できるようにすれば、外側遊星エンジンの重力

(遠心力)と合成され重力の推進方向を制御できるだろう。

遊星エンジンが自己増幅に至ると回転数が無限に上昇することになるので、過回転による装置の破壊を避けるため電気抵抗ブレーキのようにエネルギーを捨ててやらねばならない。この捨てられるエネルギーにより外部に光を放出することになるだろう。

ここでの技術課題はエネルギーをどう得るかではなく、どう捨てるかである。

遊星エンジンによる飛行物体は宇宙空間を無補給で重力によって加速し続けることができる。もうロケットなんか飛ばしている時代ではない。

## 7. おわりに

相対性理論が成立するためには遠心力は見かけの力でなければならない。相対性理論を肯定すれば遠心力を考察することが無意味になり、この文書で述べたような有意義な成果も生まれない。

相対性理論は誤りである。現実世界を反映する科学ではない。非現実な理論からは非現実な結果しか生まれない。何もかも台無しにするような話を大事に崇めるようなことはもう終わりにしたい。相対性理論は名前を変えた天動説であり、同じ過ちを何度も繰り返す愚かしいことでは何も進歩しない。

科学技術は日進月歩であり、昨日の常識は今日の非常識である。見たいものだけを見て、見たくないものは見ないという極端なポジティブ思考を行う人は真理の探究には向いていない。誤りがあれば改めることがポジティブ思考というものだ。誤った理屈でも通す練習を学校教育で行うのは感心できない。学校は正しいことを教えるべきだ。

以上